巻頭言

グローバル化の下での人間の経済活動の拡大が、気候変動や生態系の破壊といった地球規模の危機に結びついているという認識が、「人新世」という言葉とともに広まっている。エコシステムからの暴力的収奪を通じた成長に限界があるととらえ、人間中心主義を批判的に見直すことで社会経済のありかたを変革していこうとする主張が、学術領域でも社会運動の場でも重視されつつある。

コモンズとコモニングは、こうした認識において注目されている概念である。資本主義は財や資源を、個人や法人、国家や行政体によって「所有」されるものとしてとらえ、その枠組みにおいて生産を拡大し富を蓄積することを目指す点において、きわめて人間本位のシステムである。共有資源を意味するコモンズも、人間のコミュニティに水準をあてて財や資源の管理や保全を図るものであり、本来は人間中心主義を超えるものとはいえない。これに対して近年、ポスト資本主義と呼ばれる議論において、脱成長を志向するオルタナティブな社会経済システムの構想のなかにコモンズをとらえなおし、人間本位ではない新たな共同性を目指そうという声が高まっている。そうしたなかで、財や資源の共有についての議論にとどまらず、〈人間以上〉(more than human: 人間を含むすべての生命体と非生命体)の関係性において分かち合い、管理し、そしてケアしていくプロセス「コモニング」に目を向けるアプローチが関心を集めている。

この号では、このコモンズ／コモニングという概念を、フェミニスト・アプローチにおいて考察することを目指した。なぜならコモンズ／コモニングをめぐって問われている〈人間以上〉におけるケアする／される関係への関心や、その土台にある近代的人間中心主義の批判的再考は、フェミニズムの問いと深く結びついているためである。

フェミニズムは近代のなかに生まれた思想潮流であるが、近代の政治的・経済的・社会的・文化的主体としての〈人間〉から女性が除外されていることを鋭く糾弾してきた。近代ヨーロッパに生成し発展した資本主義システムにおいて、財や資源にアクセスし、そこから得られる利益を獲得し、その権利を保障する法や制度を構築することができたのは、成人男性市民のみであった。このことへの気づきはやがて、女性だけではなく植民地の人びと(先住民や黒人奴隷)への抑圧や暴力をめぐる鋭い問題意識とも結びついていった。〈人間〉以外の人びとの労働の搾取や収奪(このときの労働には、炊事や洗濯といった日常のメンテナンス、ケア、セックス、出産、その他コミュニティを持続させるためのあらゆる社会的再生産の営みが含まれる)が、資本主義システムの維持・拡大につながってきたこともとらえられてきた。開発主義やそれと表裏一体の軍事化にともなって、〈人間〉とみなされない存在の放逐やサブシステンスからの掠奪が引き起こされていることをめぐって、フェミニズム理論は重要な論点を提示し続けてきたといえる。

このような思索においてフェミニズムは、ポスト資本主義の構想に対しても有

効な問いを投げかけている。分かち合い、管理し、そしてケアしていくという関係論的プロセスに、差別や抑圧の交差のなかを生きる女性やマイノリティ、そして〈人間以上〉の存在はどのように包摂されうるのだろうか。そのことは次世代の社会関係やエコシステムをどのように方向づけうるのだろうか。

本特集ではWendy Harcourtによる論考が、フェミニスト政治生態学（Feminist Political Ecology）の視座において、社会的再生産をエコシステムと連接する課題として位置づける必要性を提起している。1992年に国連が掲げた「持続可能な開発」の目標は、企業や政府の戦略において、実態として資本主義経済の下に組み込まれてきた。Harcourtはこの点をふりかえり、近代資本主義社会において措定されてきた人間中心主義的な知識生産のありかたを批判的に再考しなければならないと示唆する。オーストラリア先住民が"Caring for Country"（地への慈しみ）という実践において、土地をそこに宿る物質的・精神的・文化的な価値や関係性の総体のなかでとらえ、世代を超えて倫理的責務を果たそうとしていることをふまえながら、再生産過程までを意識したコモニングのありかたを通じてエコロジーと人間との関係をとらえなおすことの可能性を論じている。

Chizu Satoは、人びとに望ましくない共有を強いる「ネガティブ・コモンズ」のなかでのコモニングの戦略的可能性を、静岡県の「水車の里くんま」の事例を通じて掘り下げる。この地域では1990年代以降の地方自治体再編や新自由主義的改革によって高齢化や人口減少、ケアの空白、生物多様性の喪失が引き起こされてきた。そのような地域において、地域の女性たちは不要となった田畑を活用しソバを栽培・加工・販売したり、都市住民を対象とした観光型ワークショップを開いたり、地元高齢者向けのケア活動、景観保全などに取り組みながら、生態とのつながりにおいて社会的再生産をつないできた。Harcourtによる提起を受けたケーススタディーとして読むことで、フェミニスト政治生態学におけるコモンズ／コモニングの関心をよりよく理解することができるだろう。

一方で本特集は、コモンズ／コモニングをめぐる関係のありかたが、構造的に差異化された権力の働きを免れるとは限らないということにも目を向けている。岩島史の論考は、1950年代から60年代の日本の農山村における共同洗濯の実践をとらえることで、共有資源へのアクセスや管理のありかたが共同体に埋め込まれた家父長制的な価値規範や、世帯内の「嫁」「姑」の緊張関係、そして農業や農村生活の近代化を志向する国家権力の思惑のなかで揺れ動いていたことを明らかにする。引用される伊田久美子の「昔がよかったわけではない女性には、懐かしむべき過去は存在しない」という言葉は、近代資本主義経済と結びつく家父長制的〈人間〉の権力関係を、オルタナティブな共同性の構想がとりもなおさず再生産してしまう危険性を示している。

資本主義による暴力という問題のみでなく、そうした収奪や抑圧が経験される

ローカルな社会の内部でも、あるいは抵抗運動を展開する人びとのあいだでも、発言や交渉にあたる〈人間〉とそうではない者たちとのあいだの権力関係は見過ごされやすい。今号に特別寄稿として掲載された桐山節子の論考は、沖縄の軍用地料をめぐる女性たちの裁判を事例に、近代的土地管理制度の導入から米軍による接収を経て現代に至るまでの過程において、土地とともに生きる女性たちだけでなく、同じ地域に生き延びざるを得ない、異なって状況づけられた女性たち（そのなかには米軍兵士向けの歓楽街で働く国際移住女性たちも含まれる）が沈黙させられ続けてきたことをとらえている。このようなケースからも、フェミニストの批判的パースペクティブにおいてコモンズ／コモニングが決して単純な目標ではありえないということが浮かび上がる。

だからこそ私たちは、フェミニスト的関心を基軸に〈人間〉の想定に批判的まなざしを向け、〈人間以上〉の関係を再想像していく必要があるともいえる。今号の特集が、そのような思索と討論の一助になることを願っている。

2025年7月

編集長 大橋 史恵

contents

ジェンダー研究　第28号（通巻45号）2025年

1　巻頭言　大橋 史恵

特 集

コモンズ／コモニング

研究論文

7　Debates on Sustainable Development:
Personal Insights from a Feminist Political Ecology Approach
Wendy Harcourt

21　Exploring How Commoning Helps Reconfigure Feminist Analytical Tools
in Times of Socio-ecological Crises
Chizu Sato

39　日本の農山村における洗濯機のコモニング
岩島 史

特別寄稿

53　沖縄における共有地の軍事化と女性――接収された総有の軍用地から
桐山 節子

投稿論文

69　男にとって化粧はどのような意味を持つのか――ある男性の語りと実践を通した基礎的考察
小口 藍子

書 評

84　上野千鶴子、江原由美子編
『挑戦するフェミニズム　ネオリベラリズムとグローバリゼーションを超えて』有斐閣
青山 薫

86　ジュリア・セラーノ（矢部文訳）
『ウィッピング・ガール　トランスの女性はなぜ叩かれるのか』サウザンブックス社
山田 秀頌

88　湯澤規子『焼き芋とドーナツ　日米シスターフッド交流秘史』角川書店
土屋 匠平

90　吉田容子、影山穂波編著『ジェンダーの視点でよむ都市空間』古今書院
松岡 由佳

92　吉村さやか『髪をもたない女性たちの生活世界　その「生きづらさ」と「対処戦略」』生活書院
合場 敬子

94 平山亮、佐藤文香、兼子歩編『男性学基本論文集』勁草書房
川口 遼

96 メリッサ・M・シュー、キンバリー・K・ガーチャー（三木那由他、西條玲奈監訳）
『女の子のための西洋哲学入門　思考する人生へ』フィルムアート社
槇野 沙央理

98 大畑凜『闘争のインターセクショナリティ　森崎和江と戦後思想史』青土社
君島 朋幸

100 小田原のどか、山本浩貴編『この国（近代日本）の芸術 〈日本美術史〉を脱帝国主義化する』月曜社
村上 由鶴

102 宋連玉『植民地「公娼制」に帝国の性政治をみる　釜山から上海まで』有志舎
菊地 夏野

104 ジョアン・C・トロント（岡野八代監訳）『ケアリング・デモクラシー　市場、平等、正義』勁草書房
武田 宏子

106 豊田真穂編『優生保護法のグローバル史』人文書院
貴堂 嘉之

108 山崎明子『「ものづくり」のジェンダー格差　フェミナイズされた手仕事の言説をめぐって』人文書院
大室 恵美

110 エルザ・ドルラン（ファヨル入江容子訳）
『人種の母胎　性と植民地問題からみるフランスにおけるナシオンの系譜』人文書院
伊達 聖伸

112 土屋葉編著『障害があり女性であること　生活史からみる生きづらさ』現代書館
稲原 美苗

114 イヴァン・ジャブロンカ（村上良太訳）
『マチズモの人類史　家父長制から「新しい男性性」へ』明石書店
前川 直哉

116 編集方針・投稿規定